読書

にいがたの一冊

ある家族の航跡

田中　行明編

「ある家族の航跡」は特異な経緯をたどって世に出た作品のように思える。編者の田中行明がどういう人かはその母・志津、先年急逝した姉・佐知のことを語れば自ずとはっきりする。

志津は新潟日報の購読者ならご存じの方も多いに違いない。小千谷出身の作家で、自分の育った風土や、体験に根ざした作品を書き続けてきた。代表作に「信濃川」「遠い海鳴りの町」「冬吠え」の3部作がある。デビュー作であり、母をモデルに描いた「信濃川」から読み進めれば田中志津という1人の女性の苦難の半生が浮かび上がる。

特に「冬吠え」に入ると、酒乱の夫に苦しめられながら昭生、佐知、この書の編者の行明という3人の子を育て上げ、自らの執筆活動も貫いた志津に、厳しい風雪に耐えぬいた雪国の女性像が無理なく重なる。それはしなやかな柔軟性と豪雪を乗り越える芯の強さを併せ持った精神の象徴でもある。

2004年に59歳で他界した佐知はその母志津の精神性をキラキラと光に映えるガラス繊維の衣で包んだような心の持ち主だった。そのことは生前死後合わせて5冊刊行された詩集に目を通せば誰もが納得するだろう。僕は本書に収められている「あなた」と題する詩のうちの「沈黙さえ／言葉を語ることを教えてくれたのも／あなただった」の3行を知らず口ずさむことがある。

本書には編者行明の作品も昭生のエッセイも収録されており、また、酒乱の父の情愛に富んだ一面も志津の随筆日記「雑草の息吹き」の後書きで知ることができる。本書を読めば、昭和、平成を生き、今も生き続けている、ある家族の航跡がありありと眼前に迫ってくる。

母と姉への敬愛敬慕の思い

ただ、特異な経緯で世に出たと言ったのはそういうことではない。2011年に、佐知の全集「田中佐知全作品集」が思潮社から、13年には志津の全集「田中志津全作品集」上・中・下巻が武蔵野書院から相次いで出版された。そして、同じく13年に本書が刊行されたことで、ある家族の3部作が完成したことになる。

行明の母と姉に対する熱い敬愛敬慕の念がなかったらこの3部作は世に出なかったろう。

これは画期的なことである、と特筆しておきたい。

志茂田　景樹

（作家・よい子に読み聞かせ隊隊長）

■武蔵野書院・3675円